

初心者へのピアノ指導方法

— 公開講座「大人のためのピアノ講座」10年間の実践を踏まえて —

田 中 幸 治

I はじめに

平成14年度から23年度まで、新潟大学公開講座「大人のためのピアノ講座～もしもピアノが弾けたなら～」を、筆者が主任講師として10年間開講してきた。本論文では、大人のためのピアノ講座での指導実践をもとに、初心者へのピアノ指導方法について論じ、今後の教員養成でのピアノ指導、特に小学校教員養成におけるピアノ実技をどのように行なうか、その可能性と方向を模索する。

II 「大人のためのピアノ講座」の概要

ここでは10年間の公開講座募集要項、講義概要をもとにまとめた資料を提示し、講座の全体像を明確にしていく。

1 「大人のためのピアノ講座」が始まるまでの経緯

平成12年3月、新大教員による生涯教育セミナー「音楽の楽しみ～新大キャンパスからの発信～」と題して、新潟大学教育人間科学部音楽科の教員9名がそれぞれ1講座を担当するリレー形式のセミナーを無料で開催した。対象は高校生以上で、広く一般から受講希望者を募った。平日の夜19時から20時30分までの講座には多くの受講者が参加し、どの講座も定員の50名を遥かに超えていた。これは音楽科が主催した独自のセミナーで、広報、運営などすべてを音楽科によって行った。チラシに載せたメッセージは次の通りであった。「私たちの生活になくてはならない音の世界、人生を豊かにしてくれる音楽、そんな音・音楽の世界を楽しく解説する連続講座です。つくる、聴く、演奏する等々の活動を通して、それぞれの専門性を生かした魅力的な講座を展開いたします。」

翌平成13年は、新潟大学教育人間科学部主催の公開講座として「音楽の楽しみ」を開講した。11月～12月の毎週月曜日、19時～20時30分まで、計7回の講座は定員50名で受講料は6,800円であった。前回の音楽科主催のセミナーと同様に市民一般を対象に募集し、多くの受講者を得た。募集要項の概要は「音楽の楽しさに焦点を当て、様々なジャンルの音楽について、多角的に追求する講座である。音楽を専門とする教員が、それぞれの領域からテーマに迫っていく。なお、内容は講義だけでなく、演奏、ワークショップ等多様な体験を用意している。」であった。

これら2回の「音楽の楽しみ」は講義を主としたものであり、受講生の音楽に対する知的な欲求を満たすことはできたが、音を奏でること、演奏、表現するという点に関して、受講生が主体的に関わっていく講座ではなかった。平成14年度に音楽科で公開講座を企画したとき、実技を中心とした公開講座を行ないたいと考え、大人になってからピアノを始める人々が少しずつ増えているという当時の風潮もあり、「大人のためのピアノ講座～もしもピアノが弾けたなら～」を開講することとなった。その時の概要は以下の通りであ

る。「ピアノ経験の有無に関係なく、楽しんでピアノを弾きたい、勉強したいという人のために、ピアノ実技の指導を行う講座である。毎回の講座では様々な角度からピアノを弾くということを考察し、実技指導も公開で行うため、聴講のみの受講生にも対応している。大学でピアノ指導を行っている田中幸治、鈴木賢太両講師と大学院生4名がアシスタントとして実技指導にあたり、受講生の視点に立って進めていく。」この概要からもわかる通り、ピアノを弾きたい、聴きたいという人たちを中心とし、経験者、未経験者、聴講のみを希望する者など、幅広い受講生を想定して募集した。

2 講座の骨組み

平成14年度から始めた「大人のためのピアノ講座」10年間における実技受講者は、のべ218名にのぼる。それぞれの年度での講義回数、期間、曜日、時間、受講人数、実技人数、その内訳は〈表1〉の通りである。

〈表1〉「大人のためのピアノ講座」10年間の概要

年度	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	計
講義回数	8	8	8	9	9	10	10	10	10	10	
期間	6月～8月	5月～7月	5月～7月	5月～7月	5月～7月	5月～7月	4月～7月	4月～7月	5月～7月	4月～7月	
曜日	火	月	月	月	月	月	木	木	木	木	
時間	19時～ 20時30分	19時～ 20時30分	19時～ 20時30分	19時～ 20時30分	19時～ 20時30分	12時55分～ 14時25分	19時～ 20時30分	19時～ 20時30分	19時～ 20時30分	19時～ 20時30分	
受講人数	29	24	23	22	26	17	24	20	25	25	235
実技人数	20	24	21	22	26	14	22	20	25	24	218

(内訳)

男	70代					1		2	1		4
	60代	5	3	5	3	3	2	7	3	3	39
	50代	1	1	1	1	2					8
	40代	1	1	1				1			5
	30代	1		1	3				2		8
	20代	1	1				2				4
	10代	1							1		3
女	80代								1	1	2
	70代				1			1	1		3
	60代	1	2	2	4	3	7	3	6	2	37
	50代		4	2	2	5	2	3	2	8	31
	40代	4	4	3	4	6	1	2	3	1	28
	30代	4	6	4	4	4	2	3	1	3	32
	20代	1	2	2	1	2		3		2	13
	10代								1		1

以前「音楽の楽しみ」を開講した時のアンケート結果に、だんだん日が長くなる方が大学に通いやすいというものがあり、期間は4月から8月に設定した。大人になってピアノを始めるというのは勇気が必要で、ピアノを弾いてみたいという憧れと同時に、なかなかうまく弾けるようにならないという心理的なストレスも大きいことが予想されたため、このような期間設定をし、10年間ほとんど同じ期間に行った。

平成14年度から18年度まで、「大人のためのピアノ講座」は実技を主体としながらも、聴講のみの希望者にも対応するため、19時～20時30分の1回の講義のうち最初の30分間はテーマを決めて講義を行なった。年度ごとの講義題目の変化と担当講師の専門領域を〈表2〉にまとめた。

10年間の講義題目を見ると、1回目は「音楽経験と選曲」、最後の2回は必ず「リハーサル」「発表会」となっている。「音楽経験と選曲」では受講生の自己紹介と最後の発表会で弾く曲の相談、受講生のみで行う発表会の前の「リハーサル」、そして講座最後の市民一般に公開する「発表会」で、「大人のためのピアノ講座」の骨組みとでもいうべきものである。この骨組みが10年間変化せずに維持できたということは、人前で発表するという一見受講生にとって大きな負担となりそうなことが、実は励みや目標となり、ピアノが弾けるようになるための大きな原動力となっていたからではないかと考えられる。

講座の初めに、「どんな音楽経験がありますか？」と質問すると、よほどピアノに自信がない限り、ほとんどの人が「たいした音楽経験はありません。」と答える。しかし、音楽を聞いて楽しいと感じたことがあ

<表2> 講義題目の変化

年度 講義回	14、15	16	17	18	19～23
1回	音楽経験と選曲	音楽経験と選曲 楽譜の読み方	同	同	音楽経験と選曲 楽譜の読み方
2回	楽譜の読み方 *	作品の ストーリー *	時代特有の 演奏方法 *	楽譜にこめられた 思い *	テンボを感じて 弾く
3回	練習の方法	練習の方法	ピアノの音響 **	ピアノの音響 **	強弱をつけて 弾く
4回	ピアノを楽しむ ために	ピアノ作品の歴史 ***	ピアノ作品の歴史 ***	ピアノ作品の歴史 ***	歌って弾く
5回	ピアノの歴史	ピアノを楽しむ ために	質問と練習 (1)	質問と練習 (1)	質問と練習 (1)
6回	生涯学習としての ピアノ **	ピアノの音響 **	質問と練習 (2)	質問と練習 (2)	質問と練習 (2)
7回	リハーサル	リハーサル	質問と練習 (3)	質問と練習 (3)	質問と練習 (3)
8回	発表会	発表会	リハーサル	リハーサル	質問と練習 (4)
9回			発表会	発表会	リハーサル
10回					発表会

担当講師の専門 *作曲、**音楽教育・音響学、***音楽学、無印 ピアノ

る人、聞いた音楽から何かしらの影響を受けたことがあるという人は、その音楽がクラシック音楽でなくても、音楽経験が有るということになりますと説明すると、ほとんどすべての人が立派な音楽経験をもっているということに気がついてくれる。ピアノが弾けるか弾けないか、楽器ができるかできないか、知識があるかないかなど気にせず、音楽のもつ力に触れて何か感じたことがあるかどうかが大切だということを何度も話しながら、講座でピアノを弾く意味をそれぞれに考えてもらうようにするのである。そして、なぜこの講座を受講したのか、これまでにどのくらいピアノを弾いたことがあるかなど自由に話しながら自己紹介をしてもらう。講座の受講理由には、「退職後に何をするか考えた時に、子供が習っていたピアノがそのまま家にあるのでピアノを始めたくなった。」「病気をしたり親の介護をしたりした時に音楽に癒されたので自分で演奏したくなった。」「指を動かすと頭の働きが良くなり、ほげないと聞いたから。」「好きでずっと弾いているが、ちゃんと人に習ってうまくなりたい。」など本当に様々な理由が挙げられる。だいたいの人がピアノ経験者で、全くピアノに触ったことがないような初心者は気後れしてしまい、場違いなところに来てしまったと後悔してしまうのだが、かなりの覚悟をし、勇気を振り絞ってこの公開講座に申し込んでいるので、最後の発表会まで頑張って練習をして、何とか1曲は弾くようになりたいと思うようになる。実技指導する講師とアシスタントも受講生の目的や性格を自己紹介から理解し、それぞれのピアノの実力を想像しながら選曲の手助けをし、受講生とのコミュニケーションを取っていく。ただ楽譜が読めるようになって、指が動くようになって、間違えずに演奏できれば音楽になるわけではなく、1人1人の動機や目標、音楽に対する心構えや姿勢が非常に重要で、そのことが実技の上達にも大きく左右してくる。受講生同士もお互いの目標を共有し、助け合ったり励ましあったりしながら最後の発表会を迎える。そのためにも1回目の講座は非常に重要な場となるのである。

発表会では、家族や知り合いを招待して、自分で選んだ好きな曲、思い出のある曲などをステージで演奏する。受講生の名前が載ったチラシを作成し、市内の各所に配布し、新聞に広告も出して大々的に行う発表会は、初心者にとって大きな負担であるが、プラスに働けば大きな励みとなる。発表会で演奏する緊張感は逃げ出したくなるほど大きなものであるが、順番がくればステージに上がり、失敗しようとか何が起きようと最後まで演奏しなければ終わらない。発表会に出演する受講生には、演奏するにあたってあらかじめコメントを書いてもらい、演奏の直前にそれを紹介し、少しでも緊張をほぐしてもらおうと工夫した。ほとんどの受講生は演奏するまで、緊張して二度と人前では弾きたくないと思ってしまうようだが、演奏が終わると次回はもっとうまく演奏したいと次のことを考えてしまう受講生も少なくないようである。音楽を人と共有するという喜びは理屈ではなく、全身全霊で感じるができる貴重な体験である。筆者は10年間の講座でこのことを何度も実感することができた。

3 講座の変化

講座を10年間続けると、次第に改善されていった点、変化していった点が何点かある。

まずは講義回数が8回から徐々に増えていき、平成19年度からは10回としたことだ。最後に発表会を行うことを考えると、実技指導の時間をなるべく多く確保したくなっていく。また、受講生もなるべく実技指導の機会を多く得たいと思うのが当然で、回数の増加は自然なことであった。

平成14年度から16年度の3年間は、各講義の始め30分は講義としてテーマを決定して、講師から受講生に話しをする形をとっていたが、17年度からは発表会が近づいて来る頃になると、「質問と練習」という講義題目にし、受講生の普段の悩みや質問を全員の前で聞いて分かち合い、より受講生の立場に立った方法で発表会に向けて練習していくというスタイルに変化していった。

「大人のためのピアノ講座」を始めた当初から力を入れた点は、ピアノ経験がほとんどない初心者の受講生の応募を促し、多く受け入れることであった。17年度までは、大学でのこの講座の存在を一般に認知してもらうことと、初心者でも弾けるようになるということ、毎年発表会で実際の成果として発表して聴いてもらうことを地道に続けるだけであった。そして18年度の募集要項の講座の概要で「毎年、初心者の方も受講し、ピアノを弾く楽しさに目覚めています。」という一文を加えて、積極的に初心者の応募を促していった。しかし、一度受講した実技受講生がリピーターとして何度も応募するケースも増えていたため、なかなか新しい初心者の受講生の獲得には至らなかった。

平成19年度には、夜開講していた講座を昼に開講するという新しい試みを行ない、しかもタイトルを「大人のためのピアノ講座～もしもピアノが弾けたなら～★初心者コース★（今回は特に初心者の方を対象としています。）」として募集した。その時の講座の概要も次のように大きく変更した。「ピアノ経験がほとんど無い方々を対象にピアノ実技の指導を行う講座です。ピアノを習いたいけれど、どこに行けば良いか分からない、企業の音楽教室や個人のピアノ教室に行くのは気が引ける、今から習っても弾けるわけがないと思いついてる等、音楽やピアノが好きなのに初めからあきらめている人が多くいます。これまでも新潟大学でのピアノ講座をきっかけにピアノを始めた方々がたくさんいらっしゃいます。少し勇気を出してこの講座を受けてみませんか？10回の講座の目標は、音符やリズムの読み方をマスターしながら、簡単な両手の曲を発表会で弾けるようになることです。大学でピアノを指導している田中幸治准教授と、学生のアシスタント2名が実技指導にあたり、受講生の視点に立ちながら進めていきます。」これにより多くの初心者の受講生をむかえることができ、夜に参加できないという受講生も参加することができた。しかし大学の授業の関係から筆者一人ですべてを行わなければならなかったため、募集定員も20名から12名に減員しなければならず、昼開講は難しいと判断し翌年からは夜開講に戻した。

平成19年度からの講座では、それまで行っていた最初の30分の講義を取りやめ、すべてピアノ専門の教員が講座を行うこととし、より実技に重点を置くようになった。とは言え、全く講義をしないわけではなく、実技に直接結びつくような講義を少し行い、すぐにグループに分かれて実技指導を開始するというものであった。講義題目としては「テンポを感じて弾く」「強弱をつけて弾く」「歌って弾く」というものと、前述した「質問と練習（1）～（4）」である。

平成20年度から23年度までは、特別に★初心者コース★と明記はしなかったが、それまで早い者順で受け付けていた申込方法を変更し、「初めて実技を申し込まれる方を優先させていただきます。実技申込者が多数の場合は抽選により決定させていただきます。」と明記することにより、初心者を多く迎え入れられるように工夫していった。

Ⅲ 初心者への実技指導

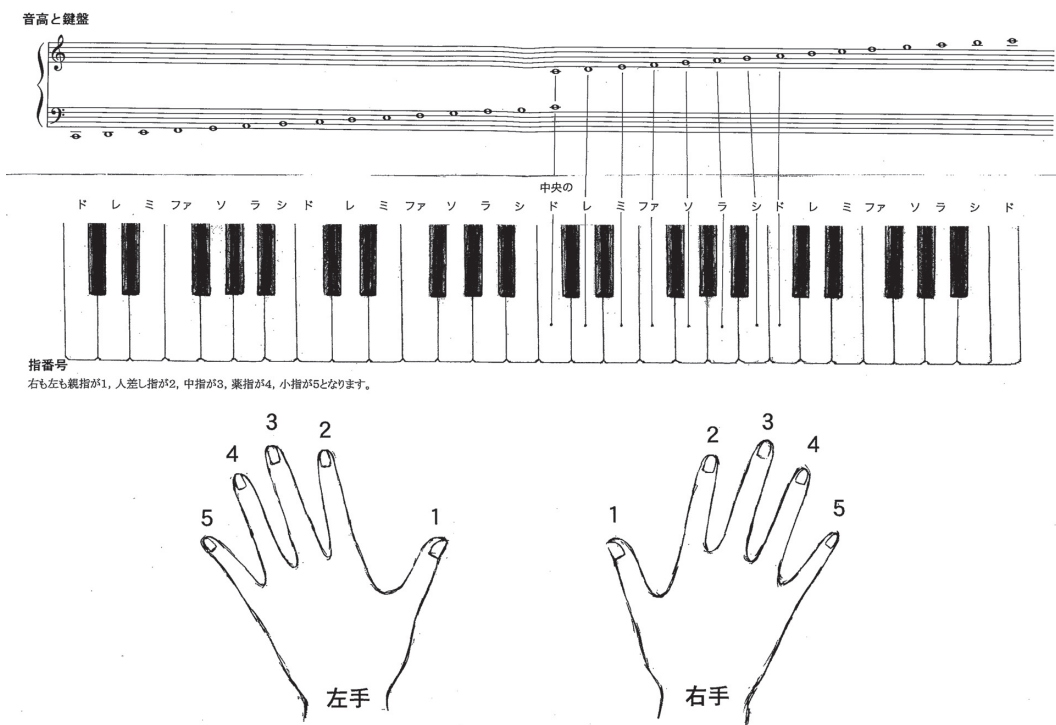
10年間の講座での指導実践から、特に初心者への実技指導をいかに進めていくと良いか、具体例を挙げながら論じていく。

1 初回の指導

平成14年度から16年度にかけて、初回に自己紹介をした後に、どのようにピアノ実技を行うか試行錯誤し

ていたが、17年度からはテキストに＜図1＞のような音高と鍵盤、指番号を明記したものを載せるようにし、初回の実技指導の方向を決定づけた。大学院生アシスタント達が、大学院の授業の中で、大人の初心者の人にピアノを指導することを想定して作成した教材が、この＜図1＞である。

＜図1＞



＜図1＞の楽譜の「中央のド」が、実際のピアノでどこの鍵盤かを説明し、音符が順番にドレミファソラシドとどのように記譜されているか説明する。そうすれば楽譜を見て、どの音符が何の音でどの鍵盤なのか、ゆっくりでも数えればわかるようになる。子供の場合は説明しても理解できないので、繰り返し聞かせて歌ったり、練習したりして習得するのを待つのだが、大人の場合は知識や理解力があるので、理屈さえ説明すれば何とか実践に移すことができる。その上で両手の指番号を教え、＜図2＞の「2度」という楽譜を見せ、直ちに弾かせる。この曲も大学院生が作った両手での指の動きの練習のためのもので、1段目「左右対称の動き」2段目「平行の動き」3段目「片手ずつの動き」4段目「両手での違う動き」という、それぞれ4小節からなる練習曲である。最初の「左右対称の動き」「平行の動き」の2曲は簡単なので、初心者でも楽譜を読んで両手で弾くということが10分くらいで楽に経験できるようになっている。「片手ずつの動き」「両手での違う動き」の2曲は少し複雑になってくるが、少し練習すれば何とか弾ける程度の難しさである。初心者の受講生が、初回の指導でこれらの曲をすぐ弾くことができれば、ピアノを両手で弾くことはそんなに難しいことではなく、練習すればできるようになると実感することができる。そうすれば、最後の発表会へ向けて練習することも可能になってくる。まず初心者にとって、ピアノを弾くことはそんなに難しいことではないと感じさせることが、その後の上達の第1歩である。

<図2>

2 度

The first system of musical notation consists of two staves. The upper staff is in treble clef with a common time signature (C). It contains a sequence of notes: C4, D4, E4, F4, G4, A4, B4, C5, D5, E5, F5, G5, A5, B5, C6. The lower staff is in bass clef with a common time signature (C). It contains a sequence of notes: C3, D3, E3, F3, G3, A3, B3, C4, D4, E4, F4, G4, A4, B4, C5. Fingerings are indicated by numbers 1 through 5 above the notes in the upper staff and below the notes in the lower staff.

The second system of musical notation consists of two staves. The upper staff is in treble clef with a common time signature (C). It contains a sequence of notes: C4, D4, E4, F4, G4, A4, B4, C5, D5, E5, F5, G5, A5, B5, C6. The lower staff is in bass clef with a common time signature (C). It contains a sequence of notes: C3, D3, E3, F3, G3, A3, B3, C4, D4, E4, F4, G4, A4, B4, C5.

The third system of musical notation consists of two staves. The upper staff is in treble clef with a common time signature (C). It contains a sequence of notes: C4, D4, E4, F4, G4, A4, B4, C5, D5, E5, F5, G5, A5, B5, C6. The lower staff is in bass clef with a common time signature (C). It contains a sequence of notes: C3, D3, E3, F3, G3, A3, B3, C4, D4, E4, F4, G4, A4, B4, C5.

The fourth system of musical notation consists of two staves. The upper staff is in treble clef with a common time signature (C). It contains a sequence of notes: C4, D4, E4, F4, G4, A4, B4, C5, D5, E5, F5, G5, A5, B5, C6. The lower staff is in bass clef with a common time signature (C). It contains a sequence of notes: C3, D3, E3, F3, G3, A3, B3, C4, D4, E4, F4, G4, A4, B4, C5.

2 指導のポイント

初心者への指導のポイントは様々だが、10年間の「大人のためのピアノ講座」での指導実践によって、ポイントが絞られて来た。〈表2〉の講義題目の変化からも明らかなように、筆者は次の3点を初心者への指導の重要なポイントとして挙げる。

(1) 曲の流れを感じて弾く

初心者の演奏でまず気になることは、音の高さを間違わないように弾こうとばかりして、拍子やリズム、曲の流れをないがしろにしてしまうことである。実際の演奏では音の高さを間違えても、言い換えればミスタッチをしても、テンポが崩れないで拍子やリズムが安定している方が音楽的な演奏になる。これは極端な言い方ではあるが、音を間違えるたびに弾き直していると、音楽をするという行為ではなくなり、楽譜の音をただ単にピアノの音に移し替える訓練の成果を聞かせる行為になってくる。他人が演奏したり、歌ったりする行為に人々は何を期待するのか。もちろん正確な演奏を期待するし、演奏の技術も高い方が良いに決まっている。だから初心者は、自分には無理だとあきらめてしまうが、実際には初心者の弾くピアノに感動することはよくあることで、300名近い学生が受講する音楽の授業で初心者の発表会の様子を映像で紹介すると、その授業へのコメントに必ず「感動しました。」というものがいくつも見られるのである。音楽の流れを作って、その流れに乗って弾く練習をしていくと、一人一人の音楽の感じ方を音によって表現し始めるのである。これは初心者であればあるほど演奏に現れてくる。

ピアノという楽器で自分の思ったように音の流れを作るには、歌のように直接的に音を出すことができるのではなく、指を動かしてから音が出てくるまでに多くのものが間接的に関わっていることを知っていなければならない。指を動かして鍵盤を下げると、複雑な内部の構造が動き、最終的にはハンマーが弦をたたいて音が出てくる。だから、ピアノを弾く人は音の動きを直接コントロールしているという感覚が少なくなる。自分では流れを作って、生き生きとしたリズムで弾いているつもりでも、客観的に音を聞いてみると思ったようになっていないことはよくあることである。

これらのことを克服し、自分の感じている感覚と実際の音の動きを一致させるために、次のような練習をしてみると良い。まずは曲のテンポを決めて、拍子を意識して手拍子を打ったり、指揮をしたりしながら曲を口ずさむ練習をする。そしてピアノを弾くことに移行していくのだが、ここでは、集団での実技指導が非常に有効であった。2つのグループに分かれて、1つのグループが手拍子で拍子を取り、それに合わせてもう一つのグループが曲を弾く練習をする。初心者にとっては曲に合わせて一定のテンポで手拍子を打つことも難しいし、手拍子などに合わせて弾く練習をすることも非常に難しい。だからこそ、ピアノから少し離れても、テンポの中で拍子を取ったり、リズムを生き生きとたたいたりするような、ソルフェージュ的な訓練が非常に重要である。

ピアノを弾くとき、曲が持っている自然な流れを感じ取り、一度始めたら最後まで流れを止めないで、いつも安定したテンポで弾く。このことを何度も繰り返し大人のピアノ初心者に説明し、音の高さを読むことよりも、楽譜の流れを追ってテンポを決めることにまず意識を持たせ、だんだんと音の高さを読み取るように指導したい。

(2) 強弱をつけて弾く

ピアノという楽器は強弱を自由につけられる鍵盤楽器である。初心者にとっては自由に強弱をつけることができるというよりも、指の都合で勝手に強くなったり弱くなったりしてしまうという、調節が難しい楽器ということになる。大人のピアノ講座の10年間の実践からは、常に強く1つ1つの音をたたいてしまうか、音を鳴らすことが難しくて常に弱くなってしまうかのどちらかになってしまう受講生が多かった。

まずは1つの同じ音を2か3の指で何度も連打し、だんだん強くしたり弱くしたりすることができることを確認し、どのように打鍵すれば音の強弱が変化するか体験することから始めたい。理屈から考えれば、鍵盤を速く下ろせば強くなり、ゆっくり下ろせば弱くなるのだが、それを考えながら打鍵するのではなく、鍵盤をどんな感じで打鍵すれば強弱がつくのかを、手指の使い方から感覚的に経験することが大事なのである。しゃべる時に大きな声にしたり、小さな声にしたりすることができるのと同じような感覚で、ピアノの

音に変化をつけられれば良いのである。そのくらいピアノという楽器は音を出し易く、強弱もつけ易い楽器であることを常に自覚させて取り組みたい。

楽譜を見ると様々な強弱記号が書かれているが、それをそのまま絶対的な強弱として、音量のつまみを回すように機械的な強弱をつけるのでは、音楽にはならない。例えばフォルテの記号が書いてあるからといって、ただ強いという訳ではない。怒ったような強さなのか、包み込むような強さなのか、ただの騒音のようになぎやかさなのか、その前後のつながりや曲の性格によって様々なフォルテがある。人の話し声を例にとってもわかるように、声の大きさが変化するとき、その声を出している人には何らかの気持ちの変化や、何らかの意図や理由があるはずだ。そのようなことを理解してピアノの演奏に強弱をつけるように促すのが理想ではないだろうか。歳を重ねた大人の初心者だからこそ、それまでの経験から様々な想像をしながら、音楽的な強弱を考えていくことができるのではないだろうか。強弱をつけるのはちゃんと弾けるようになってからと、勝手に壁を作ってしまうよりも、できるかできないかは別にしても、音楽的な強弱の意味というものを理解するように指導すれば、音楽の面白さ、楽しさも理解でき、上達したいという意欲も高まるのではないだろうか。

(3) 歌って弾く

音楽の基本は「うた」であり、器楽演奏はすべて、どのように楽器を歌わせるかにかかっていると言っても過言ではない。ピアノの初心者にとってピアノを演奏して、その音を歌わせるのは至難の技である。特にピアノという楽器は、弦をハンマーでたたいて音を出すという発音上の特性によって、一度鳴らした音は延びている間ただただ減衰するしかなく、完全に滑らかにつながって演奏することはできない楽器である。他の楽器、例えば弦楽器や管楽器などは、弓の使い方や息の使い方によって滑らかに音をつなげて歌わせることが可能であり、また一度鳴らした音を伸ばしたままで自由に音量や音色をかえることができる。したがって、ピアノという楽器を歌わせて演奏しようとする時、ピアノの特性を理解した上で練習をしなければならない。

大人のピアノ講座でも、ピアノで滑らかに歌わせて演奏するというのを、実際の演奏で習得するのは非常に難しく、鍵盤を両手で間違えないで押さえることだけでも大変なのに、その上レガートで歌わせてと言っても最初は全く理解できない状況である。しかし、レガートで歌わせている演奏と、そうでない演奏を同じ曲で筆者が模範演奏すると、ほとんどの受講生は違いがわかり、滑らかで歌わせる演奏をしたいと思うようになる。

まずよく試みる方法は、演奏している曲のメロディーを実際に声に出して歌ってみる方法である。これは非常に有効な方法と考えるが、これまでに楽器の演奏経験が少ない人、歌う経験が少ない人は、文章を棒読みするように、メロディーの音の高低だけ気をつけて音にしてしまうのである。これこそ改善したい点であり、これを美しく歌えるようになればピアノの演奏も変化してくるし、簡単な曲でもどのように練習していけば良い演奏になるのか、はっきりとした目標を持つことができるようになる。

メロディーを歌うには、まずそのメロディーのまとまりを考えなければならない。文章でいえば句読点によるまとまりであり、音楽ではフレーズと呼ぶが、このフレーズを意識することが重要である。楽譜を読んで、ある程度弾けるようになっていれば、このフレーズのまとまりを見つけるのは容易なことである。次は、このフレーズの中で一番重要な音、大切な音、重心のかかる音、強くしたい音を探すことである。その音は、フレーズの中で高さが高い音、音価が長い音である場合が多いが、拍子の拍感とも関係してくる。この音だと思える音ははっきりしない場合、いくつか候補を挙げて、その音に向かって大きめに音を大きくしていくように歌ってみて、一番心地よく歌えるもの、不自然に感じないものが核となる音である。良くわからないという場合も、指導者が大きめに歌ったり、演奏したりしてみせると、すぐに理解して納得する。

次はそれをピアノで演奏するのだが、強弱もままならない初心者が歌っているように滑らかに弾くことはやはり難しいことである。ピアノの音を聞きながら、音をつなげてフレーズに合った強弱の変化をつけられれば良いのだが、まずは実際に歌いながらピアノを弾いてみるようにすると良い。こうすることで、息を使いながらピアノを弾くことができ、不自然な身体の緊張がとれてくる。初心者は楽譜にしがみついても、又は鍵盤にしがみついても、息を詰めて練習していることが多い。これでは上半身が固まってしまう、強弱をつけようと思っても、手や手首、腕、上半身がうまく動かず、結局変化の無い、1つ1つの音の羅列になってし

まう。実際に歌いながら弾くとフレーズの核も意識できるし、息を伴っているので身体の動きもかなり自然になってきて、音に柔軟性が出てくるはずである。そうすれば少しずつ、メロディーを歌うように弾く喜びを感じるができるようになり、練習も意味の有るものになっていくであろう。

IV まとめ

初心者へのピアノ指導を論じる際に重要なのは、指導者の側から音楽的な限界を決めてしまわないことである。技術的な問題はもちろん多くあるし、技術的な習得なしに音楽的な理想を述べても意味がないことも理解できる。しかし、技能の向上や専門性の追求に集中するあまり、「音楽」という目標を見失ってしまうことのほうが問題であろう。実際に今回論じた初心者へのピアノ指導のポイントについても、初心者に対してのみではなく、上級者にとっても外せないポイントばかりである。上級者にとっても難しいものを初心者に指導するのは困難で、かえって混乱を招くのではないかと考えてしまうが、今回対象とした初心者は大人であり、自分の力で整理していくことができる人々であった。教員養成でのピアノ実技指導もだいたい20歳前後の大人で、様々なことを知的に理解し、実践に移す力を備えていなければならない学生たちである。しかも教員になりたいという具体的な目標もあるのだから、ピアノを弾きたい、うまくなりたいという十分な動機がある。

「音楽では、音によって表現をすることがまず求められる。表現する者は自分自身の感じることや、考えなどに基づいて、責任をもってそれを行なわなければならない。受け取る者は、自分の独自の方法で自由に楽しんでいく。その時、人々は互いに認め合っていて、どんな表現をしようと、どんな受け取り方をしようと許されるべきである。表現とは普段の生活のなかの非常に大切な部分であり、そのなかの1つとして音楽があり、決して特別なものではなく、自然に人々の生活に溶け込んでいるものである。このような音楽というコミュニケーションの道具として、ピアノはとても使いやすく、また大きな可能性を持っている。」¹⁾以前筆者が述べたことであるが、このピアノの可能性は10年間の「大人のためのピアノ講座」の実践でますます広がってきていると感じる。

誰でもすぐに音が出せるピアノは、音楽の基礎を習得するのにとても便利な楽器である。しかし、一人一人の音楽とのつきあい方、楽器との関わり方はそれぞれ違う。音楽を伝えよう、指導しようとするものは時間をかけて一人一人に向き合わなければならない。初心者へのピアノ指導も、ただ単に音楽の知識やピアノの弾き方を表面的に教えるのではなく、音楽を奏するためにはどうすれば良いのか、そのことを常に考えながら行っていくべきものである。

註

- 1) 田中幸治『音楽科教育の実践学－大学の研究と音楽授業をつなぐ－』新潟大学教育人間科学部音楽科 (2003年1月) 三恵社 pp.86